

Weil ich habe Hunger と *weil ich Hunger habe*: 2 つの *weil* 構文の機能と選択条件

宮下 博幸

1. はじめに

1993 年のこと、ドイツ語教員のための雑誌 *Praxis Deutsch* の編集部に、ハンブルクのある抗議団体から一通の手紙が届けられた。その団体の名は「因由文を救え (Rettet den Kausalsatz)」。この団体はドイツ語の接続詞 *weil* が話し言葉において「誤って」主文の語順で使われる傾向を憂慮し、すでに学校や父母会、さらには間違った使い方をした政界やメディアに登場する著名人に対し、注意を喚起する文書を送っており、それゆえこの編集部にも協力を願いたいという。またそのような文書を受け取った著名人の反応は多様であったが、皆この抗議の内容については同意を示したのことである (Eisenberg (1993))¹。

ドイツ語では周知のように主文では定動詞が第 2 位に置かれるが、副文、すなわちいわゆる従属節では、主文とは異なり定動詞が最後に置かれるという規則がある。例を挙げよう。

(1) Ich habe Hunger.

I am hungry. (lit. I have hunger.)

(2) Ich kann nicht mehr arbeiten, weil ich Hunger habe.

I can't work any more, because I am hungry.

¹ もちろん Eisenberg はこの活動に協力を表明することはせず、誤りには規範の上での誤りと言語体系における誤りがあり、この場合は前者であることを指摘し、また誤りとされる語順の *weil* の機能がもう一つと同じではないことを他の研究者を援用しつつ紹介している。

従属接続詞を伴わない (1) では定動詞の *habe* (< *haben*: 持っている) が英語の対応例と同様に 2 番目にあり、主文の語順を取っているが、(2) の *weil* によって導かれる副文では、定動詞 *habe* はその最後に置かれる。上の抗議団体は、本来 (2) のように副文の語順が守られるべきであるのに、模範となるべき著名人でさえしばしば

(3) *Ich kann nicht mehr arbeiten, weil ich habe Hunger.*

のように主文の語順で話す傾向にあることに抗議したというわけである²。このような言語の「退廃 (*Verfall*)」についての抗議は、日本語の「ら抜き言葉」の例を挙げるまでもなく、言語の変化とともに、言語浄化を唱える側から起こってくるのが常のようである³。さて一方言語学者はこの「退廃」現象をどのようにみているのであろうか。ドイツ語の接続詞 *weil* に関するこのような現象は、この抗議団体が摘発するより先に、もちろん言語学者の気づくところとなっていた。しかしこのような「誤り」に対し言語学者は冷静である。1984年に Weinrich は「ドイツ語の未来 (*Die Zukunft der deutschen Sprache*)」と題する論文で次のように述べている。

私はこのような成功の見込み (*weil* の発展傾向に対する抵抗が成功する見込み: 筆者注) はかなりわずかであるという意見であり、*weil* のあとの動詞第 2 位 (「主文の位置」) が将来勝利するであろうと予期している。……ドイツ語の味方であれば、接続詞 *weil* はいかなる規範の面での支援を試みたとしても (私もそれに関与しているが)、将来「主文接続詞」になるであろうという私の推測を冷静に受け止めることができよう (102 f.)⁴。

² また Wegener (1999) によれば、1994 年 3 月 9 日付のフランクフルター・アルゲマイネ紙には、動詞後置の *weil* を使わなければ罰金を取るとしたハンブルクのギムナジウムのクラスについての報告が掲載されているという。

³ 1991 年にはドイツ語諮問機関である Duden 編集部も、「特に話し言葉で現れる動詞の前置 (*Ich kann nicht kommen, weil ich habe keine Zeit. Sie war ärgerlich, weil er war nicht gekommen*) は正しくない。」としている (Günthner (1993: 56, 注 2))。

⁴ Weinrich は、*weil* を使う典型的場面である *warum* (なぜ) による疑問文に回答可能なのは *weil* のみであるが (他の因由接続詞は不可能)、またその場面で *weil* を用いずに主文のみで答えることも可能であるため、類推によりこのような変化が生じたのではないかと考えている。

この箇所には言語学者の立場がうまく表れていると言える。いくら規範的な観点から言語をもとの状態に保とうとしても、多くの人が用いれば言語は変わらざるを得ない。言語学的には規範的な観点より記述的な観点がとられねばならない。この点においては多くの言語学者の一致をみるであろう。しかしながら Weinrich のように話し言葉において頻繁に顔をみせる主文の語順の weil が、いままでの副文の語順に将来取って代わるであろうと予測する言語学者⁵はごく少数である。多くの研究では副文の語順の weil (以下副文 weil と略す) と主文の語順の weil (以下主文 weil と略す) は互いに入れ替わる性質のものでなく、むしろその機能上の相違のため共存すると考えられている。本稿ではこの2つの構文をめぐって研究者がどのような見解を提出してきたかを俯瞰することにより、両者が機能においていかなる相違をもち、またいかなる条件の下で選択される傾向があるのかを探ってみよう。

2. weil の機能⁶と2つの weil 構文

weil に関する研究を眺めると、そこにはずいぶんと異なった機能が認められている⁷。またその用法によっては、2つの weil は任意に交換可能とはならない場合もあるようである。ではどのような用法の際に、どちらが現れる傾向があるのだろうか。ここではこの2点、つまり weil の機能をどう分類するか、およびある用法でどちらの weil が出現しうるのかという点を中心に諸研究を眺めてみよう。まず用法の分類については Küper (1991) の分類を土台としたい。Küper は他の研究に比

⁵ Kann (1972: 379) もほぼ同様の予測を行っている。

⁶ 2つの weil 構文について考察する際には、一般に言語表現を扱うときに取りうるように2つのアプローチが可能である。1つは weil の有する機能から出発する視点であり、もう1つは主文 weil、副文 weil という形式がそれぞれどのような機能を担うのか、という視点である。研究によってどちらのアプローチに重点が置かれるかに差違が見られるが、本稿は我々外国人が2つの形式を使い分ける際の便宜を提供するという目的も併せ持っているため、weil の機能を出発点としたい。なおある機能の用いられ方に言及するときには「機能」と並んで「用法」という用語も以下で用いる。

⁷ しかし Willems (1994) や Pasch (1997) のように weil の機能を一つと考える立場もあ

べ *weil* に多くの用法を認め、それを命題的用法、診断・推論的用法、説明的用法、発話行為関係的用法の4つに分類している。そしてこの研究を軸に、分類に関する他の見解⁸、および第2の点、すなわちそれぞれの用法における2つの *weil* の生起の問題について見てみよう。

2.1. 命題的用法 (*propositionaler Gebrauch*)⁹

命題的用法とは、主文と副文で表される2つの状況の因果関係を表す (*p, weil q*) 用法で、副文は主文の命題にかかる (Küper: 136)。またその際 *weil* 文は主文に統合され、主文の1文肢をなし、発話者は主文で表された状況を理由づける働きをする (Wegener: 295)。また副文は主文の発話行為に統合される (Uhmann: 120)。Pasch (1984: 334) はまたこのような *weil* を2価の命題オペレータとみなしている。ではこの用法の例を見てみよう。

(4) Der See ist zugefroren, weil es Frost gegeben hat.

この例で「氷点下になった」という状況は「湖が凍結した」という命題にかかり、それを理由づけている。この用法の *weil* は日本語の「ので、から」に対応するものといえる。

次に問題となるのは、この用法で2つの *weil* 構文が同様に使われるかどうかである。この点に関しては研究によって見解の相違があるようである。

Küper はこの問題に直接には言及していませんが、副文 *weil* である(4)を命題的用法の例として挙げているのみである(136)。Wegener もこの問題についてはっきり言及してはいませんが、「発話者は、主文に統合された、文肢の資格をもつ副文である動詞後置文によって、主文で表された状況を理由づける」(295)と述べていることから、この用法では

る。これについては2.7. 参照。

⁸ ここで主として取り上げるのは Keller (1993a), Wegener (1993), Günthner (1993), Willems (1994), Denissova (1996), Pasch (1997), Uhmann (1998) である。これらの研究については以下年号は付さず、研究者名のみを記す。

⁹ この機能とほぼ等価とみなしうるものを Keller (また Wegener も) は事實的 *weil* (*faktisches weil*), Denissova は命題指示を伴う *weil* と呼んでいる。

特に副文 weil が用いられると見なしていると解釈しうる。Günthner の談話コーパスに基づく研究では、主文 weil がこのような機能を担っている談話例は挙げられていない。また Keller は「動詞後置を伴う weil は、常に命題を項として持つ事実的 weil である」と述べている (238) が、ここから逆に事実的 weil、すなわち命題的用法のときには副文 weil が現れると帰結してよいかは定かではない。というわけでこれまで皆この用法では副文 weil が用いられる傾向にあるという解答を暗示的に示すのみである。

それに対し Willems, Denissova, Pasch¹⁰ は、主文 weil もこの用法が可能であるとする。また Uhmann もこの用法で主文 weil が排除される訳ではないと指摘している (118 f.)。ここで Denissova (374) と Pasch (263 f. 注 12) が可能な例として挙げている文を見てみよう。

(5) Ich bin zur Stadt (Stadtverwaltung) gegangen, weil die Wohnung, die ich früher hatte, war schwer vermietbar.

(6) Hier dürfen Sie nicht fotografieren, weil das ist streng geheim.

これらの例ではそれぞれ「以前の持ち家の借り手がつかない」「それは極秘である」という内容の weil 文が主文の語順となっているにもかかわらず、それが前文の命題「街(市役所)に行った」「ここで写真を撮ってはいけない」にかかり、それを理由づけている。つまり2つの例はここで命題的に使われていると言える。これらは(4)と同様に「から、ので」で訳せることでも明らかである。しかし3. で取り上げるが、このような場合には主文、副文共にレーマでなければならないという、情報構造的な制限があると考えられる。また主文 weil には以下のように前域に立てないという統語的制限もある。

(7) Weil er keinen Parkplatz gefunden hat, kommt Peter zu spät.

(8) *Weil er hat keinen Parkplatz gefunden, kommt Peter zu spät.

以上を総合すると、この用法では副文 weil が典型的に用いられるが、特別な条件のもとでは主文 weil も可能な場合があるという結論が引

¹⁰ 3者はそれぞれ2つの weil 構文にはすべての用法が可能であると考えている。

き出される。

2.2. 診断的もしくは推論的用法 (*diagnostischer oder epistemischer Gebrauch*)

この用法は Küper (136) によれば *q, weil p* のように *p, q* を入れ替えたときに見られるものである¹¹。

(9) *Es hat Frost gegeben, weil der See zugefroren ist.*

(9) の *weil* 文では、先行文で表される状況に基づいて話者が行う推論（「湖が凍結した」）が述べられている（Günthner: 43）。ここでは先の命題的用法とは異なり、結果から逆に原因の推論が行われる。またここでは先行文の発言の理由づけが *weil* 文で行われているとも見なされる（Wegener: 295）。この用法では主文と副文の2つの発話が独立した発話行為を担う（Uhmann: 120）。このような場合、日本語では主文に推測を表す表現「らしい、ようだ」を加え、*weil* 文は「というのも・・・だからだ」のような形にし、主文とは独立した文にしなければなるまい。さて Küper は次のように主文 *weil* もこの用法で用いられるとしている（137）。

(10) *Es hat Frost gegeben, weil der See ist zugefroren.*

これに対し Keller は (9) のように副文 *weil* をこの用法で使うのは本来的でなく、(9) のような文は我々の世界に関する知識に照らし合わせたときに事實的 *weil* と理解するのが困難なため生ずる、聞き手の解釈であるとし、本来は (10) のように主文 *weil* を用いるか、もしくは主文に次のように話法助動詞などを補わなければならないとする（236 f.）。

(11) *Es muß Frost gegeben haben, weil der See zugefroren ist.*

Keller にとってこの用法、彼のいうところの推論的 *weil* はそれゆえ主文 *weil* のみがつべきものだということになる。また Günthner

¹¹ このような見方は Pasch (1983) にも見られる。Keller (235) はこの見方に対し批判的である。

はこの用法を推論的理由づけ (epistemische Begründung) と名づけ、その談話例と共に主文 weil を要求する要因として挙げているが、副文 weil を要求する要因には挙げていない。

他方上の Küper と同じく副文 weil にこの用法を認めるのは Willems, Denissova, Pasch, Uhmann である。しかしここでも2つの構文が任意に置き換えられるというのではないようである。この用法を許容する Pasch (259) も「態度理由づけ¹²としての weil 動詞後置文の用法は真剣に問題にすることはできない」としている。また Uhmann (126) も「そのような weil は不可能ではなく可能であるが、それほど普通ではないだけ」だとしている。Wegener (1999: 18) も「後置された動詞後置文の推論的用法は普通の場合ではない」と述べている。

以上からこの用法は典型的には主文 weil で用いられるが、特定の条件下では副文 weil も可能であると考えられる。

2.3. 発話行為関係的用法 (sprechaktbezogener Gebrauch)

この用法では主文の命題が理由づけられるのではなく、主文の表す発話行為が理由づけられるとされる (Küper: 137)。例を見てみよう。

(12) Könntest du mir mal deine Brille leihen, weil – ich habe meine verlegt.

この例で weil 文は命題的用法のように先行する発話の命題を理由づけているのではなく、発話者が発した発話「眼鏡を貸してくれないか」という内容、およびその表す依頼の発話行為を理由づけている (Günthner: 40 f.)。二つの発話はここでも上の推論的用法と同様に、それぞれ独立した発話行為をなす。これは語用論的レベルでの接続であると言える。なお Küper は、この用法では主文 weil が頻繁に用いられるとしている。

さてこの用法を一つの用法と認めるかについては研究者によって相違が見られる。Küper をはじめ Günthner や Denissova はこの用法¹³を独立

¹² Pasch は次の発話行為関係的用法も含めてこの用語を用いている。

¹³ Günthner は発話行為評価 (Sprechakt-Qualifikationen) と呼んでいる。

させて扱っているが、一方 Keller はこれを発話行為的 *weil* とする可能性も指摘しつつも、2つの違いは先行文の断言的発話行為と非断言的発話行為との違いに帰することができると考えている (242)。そしてこの用法はまた多くの研究において 2.2. の推論的用法と同質のものとして扱われている。例えば Wegener はこの用法と前節で見た用法を「発話理由づけ (Äußerungsbegründung)」という用語で一括しているし、Uhmann (1998) もこれを *weil*₂, *weil*₃¹⁴ として前の用法と一括している。

この2つの用法をひとまとめにする根拠は、両者とも先行する発話に対する理由づけであるためである。前の用法では先行文のように推論する理由づけ、この用法では先行文の発話行為およびその命題内容についての理由づけである。このことを明らかにするために Pasch (1984: 198) の挙げる図式を見てみよう。

(13) o (p1, p2)

(14) o (e (p1), e (p2))

o はここで接続詞、e は命題に対する態度である。命題的用法は (13) のように接続詞が命題 p1 と命題 p2 をつなぐものであるが、推論的、発話行為関係の用法はその命題に対する異なる態度どうしを連結するもので、おおよそ (14) のような構造をもつと考えられる。

またさらに二用法をパラフレーズすると両者の類似点はより分かりやすくなるであろう。次はそれぞれ (9), (12) を言い換えたものである。

(15) Ich vermute, daß es Frost gegeben hat, weil der See zugefroren ist.

(16) Ich bitte dich, könntest du mir mal deine Brille leihen, weil ich habe meine verlegt.

ここで *weil* 文は先行する補文を理由づけているのではなく、上位文である *ich vermute*, *ich bitte dich* をそれぞれ理由づけている。つまりこの二例の *weil* 文はどちらも補文とではなく、上位文と同一のレベルにあるといえる。それゆえこの用法と推論的用法は同一の意味構造の異なった状況における現れであると考えることができる。

¹⁴ 両者の差違は意味的なものではなく、統語的なものである。

さてこの用法ではどちらの weil 構文が傾向としてより頻繁に現れるのだろうか。この用法は診断・推論的用法と一緒にされることでわかるように、同じくまた主文 weil で用いられるのが典型的であるようである。Günthner はこの用法を主文 weil を要求する要因の1つとして挙げ、通例動詞第2位が要求されるとしている(41)。また推論的用法が副文 weil で用いられるのは普通でないとする Pasch, Uhmann, Wegener (1999) の前述の指摘は、ここでも妥当するものである。なお用法の場合にも条件が整えばもちろん副文 weil が用いられる。さらにこの用法との関連で興味深い指摘が Küper (148) にある。この用法もしくは推論的用法と似た機能が、副文 weil が前前域 (Vorvorfeld) に置かれることで現れる場合がある。

(17) Weil du es unbedingt wissen willst - ich habe alles aufgegessen.

ここで主文の倒置が起こっていないのは weil 文が前前域に置かれているためである。また weil 文は副文の語順をとりながら、統語的に主文に従属していない。この文は Küper によれば次のように書き換えられる。

(18) Weil du es unbedingt wissen willst, teile ich dir mit, daß ich alles aufgegessen habe.

このパラフレーズでわかるように、ここで weil 文は主文の発言行為を理由づけているといえる。この場合、主文 weil は不可能となる。これは上にみた結論とちょうど反対である。この現象は Küper 以降それほど注目されてこなかったが¹⁵、今後研究の必要があると思われる。

2.4. 説明的用法 (explikativer Gebrauch)

Küper によればこの用法は主文の命題を理由づけるのではなく、なぜあんな表現を使ったかを理由づける用法であるとされる(137)。

(19) Ich habe hier bekannte Musiker, die das übertragen konnten. Weil: es

¹⁵ Uhmann (127, 注 55) 参照。なお Uhmann はこれを weil4 とする可能性も指摘している。また Wegener (1999: 22) も参照。

ist eine sehr komplizierte Musik.

Küper は上の例を挙げているが、ここでどの表現の使用が理由づけられているのかは解説していない。なおこの用法は副文 *weil* にはほぼ不可能だとしている。

(19) に対し Keller はここで *weil* 文が表現を理由づけてはいないと批判している (238 f.)。ここでは何故話し手が「有名な音楽家」という表現を選んだのかを理由づけているのではなく、なぜ有名な音楽家を選んだのかを理由づけているのだとする。この Keller のこの批判は正しいように思える。では *weil* にこのような用法は見られないのだろうか。この用法を扱う研究はそれほど多くないが、Günthner はこの用法とほぼ同じものを挿入的限定 (*parenthetische Einschränkung*) と呼んで次の談話例を挙げている (46 f.)。

55D: als das noch ein reines Mädchengymnasium war,
56 weil - das war bis eh' ich glaub' ja bis in die fünfziger
57 Jahre hinein ein reines Mädchengym/nasium/
58K: /ahja./
59D: da hatte es 'nen sehr guten Ruf.

ここで 55D はなぜ「Mädchengymnasium (女子ギムナジウム)」という表現を使ったかを挿入的に説明している。ここでは主文 *weil* が用いられている。しかしこの用法で副文 *weil* が可能であるかについては言及がない。この用法は日本語では「というのは・・・からだが」のようになるだろう。

また Pasch (1997: 268) はこの用法の例を、副文 *weil* の不可能な場合として挙げている。

(20) Wer des Pfälzischen einigermaßen kundig ist, merkt natürlich sofort, daß das Wort Kääschdel ein Diminitiv, also eine Verkleinerung ist, was darauf schließen läßt, daß das Handwerkszeug *weil* - um ein solches geht es hier - nicht allzu groß ist.

(21) Wer des Pfälzischen einigermaßen kundig ist, merkt natürlich sofort, daß das Wort Kääschdel ein Diminitiv, also eine Verkleinerung ist,

was darauf schließen läßt, daß das Handwerkszeug - *weil es hier um ein solches geht - nicht allzu groß ist.

ここで weil 文はなぜ「Handwerkzeug (道具)」という表現を使ったのかを説明している。そしてこの2例のうち,(20)のように主文 weil を使う場合のみが可能であるとされる。

さらに Wegener (1999) も, この用法を副文 weil で置き換えられないものに数え入れている (21)。それゆえこの用法では主文 weil のみが可能であると考えてよいものと思われる。

2.5. ディスコースマーカースとしての用法

上で見た用法の他に Gohl / Günthner (1999) は weil のディスコースマーカースとしての用法を指摘している。ディスコースマーカースとは「基本となるメッセージの先行する談話との関係を合図する表現。(ディスコースマーカースは) ディスコースマーカースが付いている発話がいかに解釈されるべきかについての指示を聞き手に与える」(58) ものである。Günthner (1993) でも会話継続シグナルとしての機能が取り上げられていたが, ここではさらに多様なディスコースマーカース機能が談話例とともに扱われている。そこに登場するのは, 追加情報の導入, 語りのシークエンスの導入, テーマ交替の導入, 会話継続シグナルの4つの用法である。ここでは会話継続シグナルとしての1例を見てみよう。次の例は自分たちの専攻の試験の様式についての, 5人の学生による会話の一場面である。Andi は学生達が何度も試験局に苦情を言っているにもかかわらず試験の日程の発表が相変わらず遅く, まだ何の手も打たれていないことに不満を述べている。

Prüfung

- 01 Andi: ((...))
02 bisher isch ja (.) des isch alles immer schön im sand verlaufen;
03 = und den profs wars eigentlich im grund gnommen au scheißegal;
04 = weil phh (-) ja;
05 also (.) des geht dennen halt au am arsch vorbei.

(Gohl / Günthner: 53)

ここで 05 の発話は 03 の発話を単に違う表現で言い直しているのみである。それゆえこの場面での 04 の働きは発話継続の権利を獲得するための策略であり、会話継続のシグナルとされる。

このような談話上の機能が実際に *weil* の用法として定着したものとと言えるかは疑問の残るところである。Wegener は Günthner (1993: 47) の挙げている会話継続シグナルの機能に対し「これは破格構文 (Anakoluth) 現象、すなわち日常言語の自然発生的な口頭の対話に特有の現象である」(300) としている。

しかしいずれにせよこの研究は今後の *weil* の機能変化の方向を示唆しているといえ、また言語変化という問題を考えるよい材料を提供している。ここではこういった一連の用法についてこれ以上深くは立ち入らないことにする。

2.6. *weil* の機能と2つの *weil* 構文のまとめ

以上で判明したのは、

- I. 命題的用法では典型的には副文 *weil* が使われるが、条件によっては主文 *weil* も可能であること、言いかえるなら、両者は共に用いられるが、主文 *weil* には条件が課されること
- II. 推論的・発話行為関係的用法では典型的には主文 *weil* が使われるが、条件によっては副文 *weil* も可能であること、言いかえるなら、両者は共に用いられるが、副文 *weil* には条件が課されること
- III. 説明的用法は主文 *weil* のみが可能であること

である¹⁶。ここでなお残された問題は、どのような条件が典型的でな

¹⁶ ここで付言しておきたいのは、こういった用法上の差違(特に II, III. に関して)は、決して「規範」と理解されてはならないということである。これらはあくまで話し言葉における用法を観察した結果明らかとなった傾向である。ドイツ語母語話者数人にここで扱う2つの *weil* 構文について尋ねてみたが、皆「確かに主文 *weil* を聞くことはあるが、それは誤りである」と解答し、主文 *weil* を用いた方がよい場合もあると解答する者は一人もいなかった。しかしそのように言う母語話者が自然な会話の最中に主文 *weil* を用いているのも事実である。

い weil 文の使用の際に課されるかである。この問題は 3. で扱うことになる。

さて上で見た weil の用法と、2つの weil 構文の関係を研究ごとに表にまとめると次ようになる¹⁷。

Küper (1991)	命題的 ?・副	診断・推論的 主・副	発話行為関係 主・(副)	説明的 副
Keller (1993a)	事実的 (副)	推論的 主	推論的 主	?
Wegener (1993)	事実的 (副)	発話の理由づけ (主)	発話の理由づけ (主)	x
Günthner (1993)	weil + 動詞後置 (副)	推論的理由づけ (主)	発話行為評価 (主)	挿入的限定 (主)
Willems (1994)	— (主・副)	— (主・副)	— (主・副)	— (主・副)
Denissova (1996)	命題指示 主・副	診断的 主・副	発話行為関係 主・副	x
Pasch (1997)	— 主・副	— 主・副	— 主・副	— 副
Uhmann (1998)	weil1 ?・副	weil2, weil3 主・副	weil2, weil3 主・副	?

2.7. weil の機能分類における問題点

以上では Küper (1991) に従い weil の用法を4つに分類してそれぞれを考察したが、weil にいくつの機能を認めるかは、上の表のように研究によって異なっている。ある言語形式にいくつの意味機能があるとするかという問題は、weil に限らずどんな言語形式でも生じてくる問題であり、またある言語表現の意味を単義 (Monosemie) 的なものとす

¹⁷ この表はあくまで便宜的なものである。weil の形式からの視点を取る研究をこの表に当てはめるのは本来ふさわしくないが、ここでは比較のため敢えて行っている。ここで x は当該の研究で扱われていないこと、括弧にくったのははっきりと述べられてはいないがそのように推測されること、また?は記述から判断できないことを表す。また Willems と Pasch で — となっているのは、両者が weil 自体の機能は1つであると考えていることの反映である。この表を見ると Willems (1994) まではそれぞれの機能と2つの weil 構文の関係について明確な回答が与えられていなかったことがわかる。Denissova (1996) 以降の研究で記述上の精密さが高まったといえそうである。

るか、多義 (Polysemie) ととらえるかという意味論における大きな問題と直接につながっている。ここではもちろんこういった問題に解答を与えるのが目的でない。しかしここでこういった問題の生じてくる背景について、*weil* を材料に若干の意見を述べておきたい。

上の表では *weil* に複数の機能を認めようとする立場 (Küper, Günthner, Keller, Denissova, Uhmann) と、*weil* の機能を単義的なものとする立場 (Willems, Pasch) が見て取れる。ここでなぜこういった2つの見方が生じてくるのであろうか。またそれらは相容れない見方なのであろうか。

まず多義説から始めよう。この立場に立つと *weil* にいくつの意味があるかが焦点となる。つまりここでは *weil* という「語」の表す意味領域がその探求課題となる。よって多義説は *weil* という語中心の見方であるということが出来る。以上では Keller の2分類から Küper の4分類という違いが観察された。そこで次に議論となるのは、それにいくつの機能を認めるのが妥当かということになろう。しかしこれに唯一の解答を与えることは不可能ではないかと思われる。意味というのはそもそも目に見えないものであるから、それをいくつに分類するかというのはいわば無謀な企てであり、それはむしろ記述の観点によって異ならざるをえない、もしくは異なるべきものである。それはまたいきおい恣意的に異なる可能性を内在している。それゆえ意味をいくつに分類するのか、という問題には畢竟どのような観点から分類するのが重要となる。またその際それぞれの意味機能どうしの関係も考慮すべき課題となるはずである。

さて一方の単義説は *weil* に1つの意味しか認めないので、必然的にその機能的差違はその環境、特に *weil* の後の語順に目が向けられることとなる。つまり *weil* には抽象的な一つの意味だけを措定し、そのほかの違いは環境の違いにまかせてしまおうというものである。これは *weil* という語に注目するのではなく、むしろ文のレベルで *weil* を位置づけようとする立場であると言える。ここにおいて *weil* は因果関係を表す文オペレータと見なされる。Wegener は *weil* の機能は一つであるとしながらもその立場を押し進めてはいないが、Willems は Wegener のこの立場を評価し、*weil* の問題は *weil* の後の語順から考

えるべきだと主張している。Pasch はそれをさらに進めて weil のレクシコンには一般的な意味のみが登録され¹⁸、またそれとは別に主文と副文のそれぞれの機能があると考えている (264 ff.)。これは Willems の考えを推し進めた結果、当然出てくる見方であろう。こういったアプローチは他にも主文の語順と副文の語順をとる接続詞がある¹⁹ということからも、weil だけにとどまらず、関連現象を統一的に説明する力を持つという点で有効である。

以上から指摘しうるのは、2つの立場の違いは語としての weil を出発点にするか、または weil を文オペレータとみなすか、という記述のストラテジーの違いの反映であり、互いに相容れないものではないということであろう。しかしその際もちろんどちらのストラテジーがよいかという議論は可能である。しかしこの議論は言語表現の意味記述の目的によって、どちらがよいか決まるという性質のものである。たとえば辞書のように weil をひとつの語彙項目として記述しようとすれば、多義的記述に傾くことになるし、weil だけでなく他の接続詞の示す現象をも視野に入れようとすると単義的記述になる、そういう相違として理解する必要があるように思われる。

3. 2つの weil 構文の相違と選択条件

2.で明らかとなったのはまた、ある意味機能を表すのに2つの weil 構文はいつも交換可能というわけではなく、置き換えられる際にはある種の条件が満たされる必要があるということである。以上でみた用法のうち、説明的用法は主文 weil でしか用いられないという点で文献上の意見の一致を見ているようなので問題が生じないが、命題的用法と、推論的・発話行為関係的用法にはそのような問題がある。これら

¹⁸ それは次のように表されている。「weil は weil の直後に続く文によって表される状況が、他のもう一つの文の使用によって表現されうるものの理由であることを表現する」(265, 注17)

¹⁹ Gaumann (1983), Günthner (1996) 参照。話し言葉において副文の語順の他に主文の語順も取ることがあるとされるものには weil の他に obwohl, während, wobei がある。また denn もかつては現在の主文の語順の他に、副文の語順も取りえたことが知られている。

の用法は、また典型的にはそれぞれ副文 *weil* , 主文 *weil* を取るものであった。ここではまずこの二つの構文がどのような差違を見せるかを研究に探ってみよう。2つの構文は異なったレベルで違いを見せる。

3.1. 統語的相違

統語的に見て副文 *weil* は自由であり、無標といえるのに対し、主文 *weil* には制限が多く見られ、有標的である。次に統語上の差違として文献に見られるものを挙げてみよう。

3.1.1. 前域生起

主文 *weil* は前域に立つことができない。この制約は2つの構文の違いとして本質的なもので、ほぼすべての研究で取り上げられている。

(22) *Weil er keinen Parkplatz gefunden hat, kommt Peter zu spät.*

(23) **Weil er hat keinen Parkplatz gefunden, kommt Peter zu spät.*

3.1.2. 他の副文との関係

weil 文が他の副文にかかるときには主文 *weil* は不可能である (Küper: 138 など)。

(24) *Verursacht nämlich der Fahrer einen Unfall, weil ihm der betrunkene Beifahrer ins Lenkrad gefallen ist, so kann dies das Strafmaß erhöhen.*

(25) **Verursacht nämlich der Fahrer einen Unfall, weil der betrunkene Beifahrer ist ihm ins Lenkrad gefallen ist, so kann dies das Strafmaß erhöhen.* (Küper: 138)

ここで *weil* 文は先行する副文「その運転手が事故を引き起こしたとするなら」にかかっている。このような場合には副文 *weil* しか現れない。

3.1.3. 副詞句への置き換え

主文 *weil* は副詞句への置き換えが不可能である (Wegener: 293 など)。

(28) のような置き換えは副文の語順を示す (26) のみが可能であり、

主文 weil を伴う (27) の場合は不可能である。

(26) der hat sicher wieder gsoffen, weil sie total deprimiert durch die Gegend läuft.

(27) der hat sicher wieder gsoffen, weil sie läuft total deprimiert durch die Gegend.

(28) Aufgrund ihres deprimierten Herumlaufens hat er wieder gsoffen.

(Günthner: 43)

3.1.4. 相関詞生起

主文が副文との相関詞を含むときには主文 weil は不可能である (Wegener: 293 など)。

(29) Er ist deswegen nach Hause gefahren, weil er Kopfweh hatte.

(30) *Er ist deswegen nach Hause gefahren, WEIL er hatte Kopfweh.

以上の統語的相違から結論されるのは、副文 weil が生起するのは主文の中にそれが統語的に統合される場合であり、またその weil 文は普通の文肢のようにふるまうが、他方主文 weil は主文に先行できず後置のみが許され、主文に統合されるシグナルとは共起できないということである。

3.2. テーマ・レーマ構造における相違

テーマ・レーマ構造における相違もまた、2つの構文の本質的な相違のひとつである。Küper は2つの構文の見せる違いとして、たとえ weil 文を後置しても先行文がテーマとなっているとき、すなわちその内容がそれに先行するテキストで聞き手にすでに伝達されたか、場面から聞き手に明らかであるようなときには主文 weil は不可能であることを挙げている (138 f.)。例を見てみよう。

(31) Warum hast du das Geld genommen? - Ich habe das Geld genommen, weil es mir ohnehin gehörte.

(32) Warum hast du das Geld genommen? - Ich habe das Geld genommen, *weil es gehörte mir ohnehin.

(31) ,(32) の返答文での主文の内容はすでに質問文で現れているため、

それは質問者および返答者にとって既知の内容となっており、それゆえテーマであると言える。このような場合、(31) のように副文 *weil* は問題ないが、主文 *weil* は (32) のように不可能である。この制約を逆に考えるなら、主文 *weil* の先行文は未知の内容をもつもの、すなわちレーマでなければならないということになる (Pasch: 253)。一方副文 *weil* の先行文もまた次の例に見て取れるようにレーマとなりうる。

(33) A: So ein Mist! Im Wetterbericht haben sie Regen angesagt.

B: Die sind schon alle ganz niedergedrückt, weil es regnen soll.

ここで B の返答における主文内容は A によって告げられている情報でなく、B がここで新しく伝達している情報と解しうるためレーマと言える。

以上から副文 *weil* には先行する主文の情報内容の制限は観察されないが、一方主文 *weil* は主文がレーマの場合のみ可能となると結論される。

さらに主文 *weil* が用いられる際には、先行文のみならず *weil* 文自体もレーマでなければいけないとされる (Pasch: 253)。上に挙げた (33) では、A が雨だという天気予報を B に伝えているのであるから、B の発話の *weil* 文における「雨が降る」という情報は既にテーマとなっている。*weil* 文自体はレーマである必要があるため、*weil* 文がテーマとなっている (33) を、次のように主文 *weil* に置き換えることは不可能である。

(34) A: So ein Mist! Im Wetterbericht haben sie Regen angesagt.

B: Die sind schon alle ganz niedergedrückt, *weil es soll regnen.

それでは副文 *weil* 自体がレーマとなることは可能であろうか。次の例を見てみよう。

(35) A: wir müssen mal überlegen, was wir morgen machen. Weißt du,
was für Wetter werden soll?

B: Weil es regnen soll, werden wir zu Hause bleiben müssen.

ここで B の発話の副文 *weil* の内容は明らかに質問者である A にとって未知の情報であり、*weil* 文はそれゆえレーマである。それゆえ *weil*

文の情報内容は副文 weil の場合、テーマでもレーマでありうる。ちなみに主文、副文の両方がテーマであるときは主文 weil は無論不可能であるが、副文 weil は可能である (Küper: 139)。

(36) A: Warum gehst du jetzt joggen? Ich denk', du bist müde.

B: Ich gehe jetzt joggen, (gerade) weil ich müde bin.

この例の B の返答で主文と副文で表されている内容はどちらも A の質問に登場しているためテーマである。ここではある命題内容を伝えるのではなく、2つの文の間に存在する因果関係が強調されている (Küper: 139)。

以上から引き出されるのは、主文 weil のときは主文、副文共にレーマでなければならず²⁰、主文、副文のどちらかがテーマの場合は使えないが、副文 weil にはそういった制限がなく、その際主文と副文の内容は可能なすべての情報構造を持ちうる、それゆえ無標であるということである。

3.3. 韻律上の相違

両構文の相違はイントネーションおよびポーズという韻律上の違いとしても観察される (Wegener: 294 など)。

3.3.1. イントネーションの相違

副文 weil は主文と融合したイントネーション、すなわち weil 文の先行文が上昇イントネーションを見せるが、主文 weil は主文と独立しており、weil 文の先行文は下降イントネーションを示すとされる (Wegener: 294, Günthner: 43)。

(37) Peter heiratet Anna (), weil sie Geld hat.

(38) Peter heiratet Anna (), WEIL die hat Geld.

また Günthner (1996) は談話データに基づき、副文 weil が使われる場

²⁰ Keller は同じことを前提 (Präsupposition) の概念を用いて、「動詞第二位の weil 文を伴う文結合においては、両方の部分文のどちらも前提とされていない」と述べている (241)。

合の韻律上の統合は先行する主文が前提とされている場合に起こるが、その主文が新情報を含む場合には必ずしもそうでないとしている (326)。そして主文 *weil* は統語上および韻律上非統合を示すとされる (329)。イントネーション上の相違はつまり上で見た情報構造と連動しているといえる。次の例を見てみよう。

(39) Peter könnte gestürzt sein (), weil seine Verletzung noch nicht ausgeheilt ist.

(40) Peter könnte gestürzt sein (), weil seine Verletzung noch nicht ausgeheilt ist.

Küper によれば、主文のイントネーションが (39) のようになるときは主文または少なくとも主文の述語がレーマとなっている、すなわち発話者はペーターが倒れたとらしいという仮定を述べ、その理由として怪我がまだ治っていないことを挙げているが、(40) ではペーターが倒れたことが既知の事実として仮定され、まだ怪我が治っていないことがその可能な理由として挙げられているという (140)。上例のうち主文 *weil* が許されるのは主文がレーマとなる (39) のイントネーションの場合のみである。ここでわかるように韻律上の相違は、先に見た情報構造の差違に起因すると考えることができよう。

3.3.2. ポーズの相違

Wegener (294) は副文 *weil* の場合は主文と副文の間にポーズがないが、主文 *weil* の場合にはその間にポーズが置かれ、主文と副文が区切られるとする。また Günthner も同様の指摘を行っている (43)。しかし最近の研究ではこの相違は疑問視されているようにも見える。

例えば Pasch (255, 注 2) は *weil* が *denn* に取って代わったという仮定のもとで、その交代により初期にはためらいを表す *weil* の直後のポーズがあったが、後にはそれが無くなったとし、また集めた用例の中でそのようなポーズの用例はなかったとの Engel の報告を紹介している。また Weisgerber (1993: 3) もこの *weil* の後のポーズが見られなくなりつつあることを指摘している。さらに Uhmans (104, 注 21) も *weil* の後のポーズは義務的でないとしている。

しかし主文 *weil* のポーズには本来2つのポーズの可能性を考慮しなければならない。1つは *weil* の前のポーズで、もう1つは Pasch の言うような *weil* の直後のポーズである。Pasch は最初に挙げた Wegener らの研究のポーズについての言明が *weil* 直後のポーズについての言明と解釈しているように見えるが、実際は主文と副文の間のポーズというのは *weil* の前のポーズである。こちらもう1つのポーズのように衰退しているのであろうか。Uhmann はコーパスの実例では両方のポーズがないものと、両方があるものとが観察されるという(104, 注 21)。2つのポーズの問題、そのうち特に *weil* の前におかれるポーズの問題についてはさらなる経験的な研究が待たれるところであるが、ポーズはもはや2つの *weil* の違いと一義的に見なせるものではなくってきていると言えそうである。

3.4. 発話行為の相違

発話行為の相違はもちろんテーマ・レーマ構造の相違とも関わりがあるが、しばしば別個に指摘されている²¹。情報構造の相違においては主文と副文で表される命題の知識の状態(既知か未知か)が問題となるが、ここではむしろ発話者が発話行為を行う際に、主文、副文の2つの発話を同一の発話行為として発話するかという点に重点が置かれる。この発話行為上の相違を Wegener は次のように述べている。

従属的 *weil* 文は発話行為的には自立してはず、主文の発話行為に統合され、それゆえ文の部分となりうる。発話者は発話行為を1つだけ行い、状況を理由づける。等位的 *weil* 文では逆に話者は2つの独立した発話行為を行い、それぞれの *weil* 文は独自の発話行為的力を持ち、それゆえ要請や質問の部分となることなしに、要請や質問の後にくることが可能である(296)。

この相違については他の研究も Wegener とほぼ同じ指摘をしている(Uhmann: 120 など)。2つの構文の発話行為における違いを示す対立を見よう。

²¹ Günthner は主文 *weil* の特徴を「二つの部分文は別個に発言可能、すなわち独立した発言力を持ち、通常2つの文は『新情報』を持つ」としている。これは発話行為の相違と両方の見方を折衷したものといえる。ここで判るように2つの部分文が独立した発話行為を担う際にはそれはそれぞれ新情報を担うレーマであるといえる。

(41) Ist Peter zu spät gekommen, weil er keinen Parkplatz gefunden hat?

(42) *Ist Peter zu spät gekommen, weil er hat keinen Parkplatz gefunden?

(Uhmann: 120)

(41) では疑問符が最後に付けられていることで *weil* 文が主文の持つ疑問の発話行為に統合されていることがわかる。一方このような統合を示す場合には (42) のように主文 *weil* を用いることはできないとされる。ではこの例を次のようにするとどうであろうか。

(43) ?Ist Peter zu spät gekommen? Weil er hat keinen Parkplatz gefunden.

ここでは2つの独立した発話行為がなされているといえるが、すくなくともさらにコンテクストが与えられない限りこの発話は我々の世界の知識に合わないため、非文と解される。

3.5. 2つの *weil* 構文の相違のまとめ

以上で2つの *weil* 構文の見せるさまざまなレベルでの相違点を眺めてきた。ここで2.でみた用法との関係を考えてみよう。まず命題的用法の典型的特徴は次のようにまとめられる。

A. 命題用法 = 副文 *weil*

- 1) 統語的制約はなく、関係する文の文枝として現れる
- 2) 主文と *weil* 文は統合したイントネーションを示し、*weil* 前後にポーズはない
- 3) 情報構造における制限はない
- 4) 主文の発話行為に統合

また推論・発話行為関係的用法の典型的特徴は次のようになる。

B. 推論・発話行為関係的用法 = 主文 *weil*

- 1) かならず関係する文のあとに置かれる
- 2) 主文と *weil* 文は独立したイントネーションを示し、前後のポーズはあってもなくてもよい
- 3) 主文と *weil* 文は共にレーマである
- 4) 主文の発話行為と独立

3.6. 2つの weil 構文の選択条件

さて2つの weil 文が典型的に用いられる際の性質が以上で判明したが、それではこういった場合から見て非典型的な場合、すなわち主文 weil, 副文 weil がそれぞれ命題的、推論的・発話行為関係的用法で用いられる場合はどのようなものであろうか。それぞれの weil の用法には上のような特徴が観察されるわけであるから、それが他の用法で使われる際には、それぞれ他の典型的特徴が使用の際の制限となると考えられる。

以上で使用の制限となるのは、A-1), B-1) および A-3), B-3) の統語的、情報構造的相違点であると言える。他の相違点はこの2つの相違点に還元しうる。制限の点から見ると副文 weil は無標である。統語的、情報構造における制限が副文 weil にはないためである。このような副文 weil の典型用法である命題的用法で主文 weil が使われるには、それ自体の制限を守る範囲でのみ、命題的用法として使われることになる。つまり主文 weil が命題的用法で使われるには、B-1), B-3) は常に守られなければならない、それを守る範囲でのみ、命題的用法としても現れるということになる。またそのような際に主文 weil は A-2), A-4) のような特徴をも伴うものとなる。反対に副文 weil が推論・発話行為関係的用法で使われる際にも、主文 weil 特有の制限である B-1), B-3) が守られなければならないことになる。もちろん無標の副文 weil にはそれが可能である。またそのときには B-2), B-4) のような特徴を示すことになる。2つの weil 構文はこのような条件が整うときに初めて相互に交換することが可能となると考えられる。

さて以上で判明したことをここで総合してみよう。我々の懸案であった2つの weil 構文の選択条件は次のようにまとめられる。

2つの weil 構文の選択条件

2つの weil 構文はまずそのつどの用法に応じて選択され、典型的には命題的用法の場合に副文 weil が、推論的・発話行為関係的用法の場合には主文 weil, また説明的用法の場合には常に主文 weil が用いられる。また2つの構文の非典型的な使用は、主文 weil は B-1), B-3) を守る範囲で、副文 weil は B-1), B-3) を守る場合にのみ可能となる。

4. *weil* 研究の今後の展望

以上では *weil* がどのような用法を有するか、またそれぞれ用法に典型的にみられる構文はどのようなものであるか、さらに2つの構文が許される際の選択条件はどのようなものであるかが諸研究の比較によっておおよそ明らかになった。

weil については上で見たように近年多くの研究がなされてきたが、これは主文 *weil* が話し言葉に頻繁に現れてきて、そればかりか冒頭の抗議団体が指摘したように、それが広く人々に意識されるようになったことにその大きな原因がある。また逆にほぼ話し言葉にしか現れてこない²²主文 *weil* を対象にした研究のこのような活性化の背景には、言語研究において書き言葉中心の言語研究から、話し言葉をも視野に入れた研究への拡大が大きな役割を果たしているものと思われる。こういった研究状況のおかげで、2つの *weil* がいかなる機能を持つか、またどのような差があるかについては、研究者によってなお見解上の相違が見られ、まだ分析の必要と思われる部分もあるものの、これまでにある程度十分な分析・記述が行われてきたと言える。本稿ではそういった今までの研究成果の中から我々の関心事項を拾い出し、2つの *weil* 構文の機能と選択条件を探ってみた。このような研究段階で今後の課題となるのは、別の視点からアプローチを行う、もしくは分析・記述データを正確に理解した上で、どうして2つの *weil* 構文の使われ方に差が見られるのかという説明を試みることであろう。ここでは本稿で扱ったテーマから外れるものをも視野に入れて、これからの *weil* 研究の可能性について若干ふれておきたい。

別の視点という点で今後の課題となるものには例えば言語習得からの

²² 書き言葉に登場した比較的古い例としては、Brecht の *Mutter Courage* における例が知られている (Wegener: 290)。

Und der Seelenhirt schaut wieder zu, weil er predigt nur, und wie's gemacht werden soll, weiß er nicht. (B. Brecht: *Mutter Courage*)

書き言葉といってもドラマという性質上、この例はもちろん話し言葉を表現する意図で書かれている。このような例によって、少なくとも Brecht がこの作品を書いた時点で、話し言葉では主文 *weil* が使われていたと推測可能である。なおこの作品の中に主文 *weil* の用いられた例は4例あるとのことである(同上)

アプローチがある²³。また日本語、もしくは他の言語の因由文との対照研究も、ドイツ語の *weil* の議論に有益な視点を提供する可能性がある。また差違の説明という点では、*obwohl*, *während*, *wobei* という他の主文の語順を許す接続詞との関係²⁴, それらと必ず副文の語順を守る接続詞との関係, 他の因由接続詞との関係²⁵, また主文と副文の交替が見られる他の現象まで含めた主文と副文についての考察²⁶などが重要となろう。また近年、*weil* の通時的な研究においても大きな発展が見られる²⁷。

書き言葉の言語研究から話し言葉の言語研究へ。*weil* 研究はそういった視点の転回を要請してきた。言語変化は話し言葉より生まれる。言語はすなわち決して一枚岩の存在ではなく、多重的で常にそれ自身に変化の兆しを含んでいる。そういった言語の側面を見逃さぬことの重要性、それを *weil* 研究は告げているように思われる。

文献解題

以下 *weil* について扱う主要な研究の内容を簡単に紹介する。

Denissova, Marina (1997): *Nochmals: weil* mit Hauptsatz- und Nebensatz-

²³ この方面の研究としては Feilke (1997) 参照。

²⁴ Gaumann (1983), Küper (1991: 149), Günthner (1996), Pasch (1997: 264 f.) 参照。

²⁵ Pasch (1983), Wegener (1999) 参照。

²⁶ Kann (1972), Küper (1991) 参照。

stellung. In: *Convivium. Germanistisches Jahrbuch Polen*. Bonn: DAAD. S. 373-388.

主文 *weil* の代わりにすべて副文 *weil* を用いることもでき、またその反対も可能であるとする。つまり2つを意味機能的に等しいものと考えている。Willems (1993) が指摘しただけに終わったのを、実例を用いて検証したもの。

Eisenberg, Peter (1993): *Der Kausalsatz ist nicht zu retten*. In: *Praxis Deutsch* 118, S. 10-11.

「誤った」用法の主文 *weil* に対し抗議を行うハンブルクの団体「因由文を救え」からの手紙を紹介し、それに対して主文 *weil* は単に規範における「誤り」にすぎず、言語体系の観点からは誤りではなく、むしろそれが副文 *weil* とは異なった機能を担っていることを示す。

Feilke, Helmuth (1996): „*Weil*“-Verknüpfungen in der Schreibentwicklung. Zur Bedeutung „lernersensitiver“ empirischer Struktur-Begriffe. In: Feilke, H. / Portmann, P. (Hgg.): *Schreiben im Umbruch. Ergebnisse der Schreibforschung zur Praxis und Reflexion schulischen Schreibens*. Stuttgart: Klett. S. 40-53.

weil を書き言葉習得の過程から考察している。まず2 - 7年生の生徒に宿題を廃止するという提案に対し手紙の形で意見を書くよう要請する。その結果得られたデータにより、*weil* 文のタイプは8つに分類される。そのタイプを分析し、個体発生的には推論的 *weil* から因果的 *weil* が生じ、さらに *denn* や *da* は *weil* によって排除されつつあるのでなく、*weil* は最初からすべての機能を有していて、後から *denn* や *da* が加わるという事実を指摘。

Gaumann, Ulrike (1983): „*Weil die machen jetzt bald zu*“. *Angabe- und Junktivsatz in der deutschen Gegenwartssprache*. Göppingen: Kümmerle.

マインツ大学提出の博士論文。二つの語順の *weil* を会話コーパスを

²⁷ Pasch (1997) , Wegener (1999) 参照。

用いて検討した包括的論文。近年の *weil* 研究の出発点といえる。まず主文 *weil* は言語運用上の障害ではなく、言語能力に属するものだとする。また主文 *weil* は後域にしか立てず、主文 *weil* の内容は <vor erwähnt> という意味特徴を持つことを指摘。そして主文 *weil* が用いられるのはドイツ語の言語経済的傾向にその原因があるとしている。なお Keller (1993a) がこの研究の要点および問題点を簡潔にまとめている。

Gohl, Christine / Günthner, Susanne (1999): Grammatikalisierung von *weil* als Diskursmarker in der gesprochenen Sprache. In: Zeitschrift für Sprachwissenschaft 18, S. 39-75.

いままで注目されなかった *weil* の新しい機能、すなわち会話におけるディスコースマーカ―としての機能を論じたもの。*weil* はディスコースマーカ―として追加情報の導入、語りのシークエンスの導入、テーマ交替の導入、会話継続シグナルの 4 つの機能を有することを実際の談話例を挙げながら指摘。またこういった機能は接続詞 *weil* の文法化の結果生じたとしている。さらに接続詞からディスコースマーカ―への変化は、文法化の理論の再考にもつながるとする。

Günthner, Susanne (1993): „weil – man kann es ja wissenschaftlich untersuchen“. Diskurspragmatische Aspekte der Wortstellung in Weil-Sätzen. In: Linguistische Berichte 143, S. 37-59.

主文 *weil* を要求する要因と副文 *weil* を要求する要因について談話分析の観点から論じたもの。主文 *weil* は推論的もしくは発話行為関係的關係を表すようなコンテキスト、もしくは主文と *weil* 文の關係がそれほど緊密ではない場合に要求され、主文と *weil* 文の緊密な結びつきのシグナルの働きをする副文 *weil* は、発話のフォーカスが *weil* 自体にあり、*weil* 文が主文のスコープに入る場合に要求されるとする。また会話継続シグナルとしての *weil* の機能についても言及している。

Günthner, Susanne (1996): From subordination to coordination? Verb-second position in German causal and concessive constructions. In: Pragmatics 6, S.

323-356.

話し言葉で従属節の語順から主節の語順への変化の傾向が見られる *weil*, *obwohl*, *wobei* について、会話コーパスを用いた分析を扱う。*weil* は従属節の語順では主節との統合を示すが、主節の語順では発話行為領域、推論領域で用いられ、さらには先行文と直接関係せずに用いられ、たりすることをデータに基づき指摘。*obwohl* も従属節の語順では命題のレベルの関係を表すが、主節の語順では独立した言明をなし、先行発話の有効性を制限する働きをもつとされる。*wobei* は普通代名詞的副詞と考えられるが、データを見ると認容の接続詞に近づいており、またそれは主に比較的若い研究者の話し言葉に見られる最近の現象であるとする²⁸。*wobei* も従属節の語順で用いられると主節と統合され、前に述べたことについてのわずかな修正や、さらには否定を表すという。従属から等位へのこのような発展傾向は対人的相互作用の諸条件に合うように作り出された「文法のエコロジー」であると結論している。

Hofmann, Anne-Rose / Voigt, Gerhard (1990): „weil er hat nicht aufgepaßt“. In: *Praxis Deutsch* 102, S. 25-33.

ドイツ語教育の現場で2つの *weil* をどう扱ったらよいかを考察したもの。作文などで主文 *weil* を使う生徒がいても、その生徒にドイツ語ができないという評価を与えるような訂正指導はすべきでないとする。また現場での指導のための教材の例が挙げられている。

Kann, Hans-Joachim (1972): *Beobachtungen zur Hauptsatzwortstellung in Nebensätzen*. In: *Muttersprache* 82, S. 375-380.

ドイツ語の話し言葉でみられる統語的単純化の傾向（主文の語順化）を扱う。そういった傾向を示すものとして、間接話法、関係文、副詞文、*daß* 文、副文と共起する際の主文の倒置が扱われている。またそういった傾向は次第に強まっていくだろうと予測している。

²⁸ しかし岩崎英二郎・小野寺和夫共編 (1969): 『ドイツ語不変化詞辞典』の *wobei* の項 (609) にはすでにこの用法の指摘がある。

Keller, Rudi (1993a): Das epistemische *weil* – Bedeutungswandel einer Konjunktion. In: Heringer, Hans-Jürgen / Stötzel, Georg (Hgg.): Sprachgeschichte und Sprachkritik. FS P. v. Polenz. Berlin: de Gruyter. S.219-247.

Keller はこの研究で主文 *weil* の「名誉回復」をめざす。*weil* は事実的 *weil* と推論的 *weil* にわけられる。前者には副文 *weil* が対応し、後者には主文 *weil* が対応する。事実的 *weil* は「何故そうなのか」という問いに回答を与えるもので、推論的 *weil* は「どこからそれを知ったのか」という問いに回答を与えるものであるとする。推論的 *weil* は事実的 *weil* のメタファー表現として生じ、その言語変化の結果いまや *weil* はもう一つの意味である推論的意味をもつようになりつつあるとする。Gaumann (1984) と Küper (1991) の批判・検討を通じて自説を展開している。

Keller, Rudi (1993b): Der Wandel des *weil*. Verfall oder Fortschritt? In: Sprache und Literatur 71, S. 2-12.

Keller (1993a) を簡潔にまとめたもの。*weil* の変化は退廃 (Verfall) ではなく、推論化 (Epistemifizierung) の産物であり、反対に知的語彙を豊かにしているのだと主張。

Küper, Christoph (1984): Zum sprechaktbezogenen Gebrauch der Kausalverknüpfers *denn* und *weil* : Grammatisch-pragmatische Interrelationen. In: Linguistische Berichte 92, 15-30.

weil と *denn* を扱う。2つの接続詞の用法を命題的用法、第2の用法 (説明的用法に相当)、因果関係の症候関係 (推論的用法に相当)、発話行為関係的用法に分け、それぞれの用法について *denn* と *weil* の制限を検討している。特にその中で最後の発話行為指示的用法が議論の中心となっている。なお主文 *weil* は考察の対象となっていない。

Küper, Christoph (1991): Geht die Nebensatzstellung im Deutschen verloren? – Zur pragmatischen Funktion der Wortstellung in Haupt- und Nebensätzen. In: Deutsche Sprache 19, S. 133-158.

タイトルが示すように、副文の語順が主文の語順にとって代わりつつ

あるとされる現代ドイツ語の傾向を取り上げている。weil もそういった傾向の1つとして大きく扱われている。Küper (1984)と同様にここでも weil は4つの用法に分類され、さらに主文 weil が副文 weil に対して有する制限について言及される。また weil の他に主文の語順を示す傾向が高まりつつあるものとして関係文(および指示代名詞を伴う文)や補文を扱い、主文の語順が可能なのは特定のテーマ・レーマ分節を示し、独立した発話行為を担う場合のみであると結論している。また発話行為を担う機能を果たすには副文の語順より主文の語順が適切であるため、weil がこの用法の際主文の語順をとるのだと説明。

Pasch, Renate (1983): Die Kausalkonjunktionen da, denn und weil: drei Konjunktionen – drei lexikalische Klassen. In: Deutsch als Fremdsprache 20, S. 332-337.

weil (副文 weil), denn および da を外国人がうまく使い分けられるよう、その相違を考察。3つが互い交換できない場合を比較することにより、weil が2価の命題オペレータ (propositionaler Operator) で、2つの命題を結んでより複雑な命題にする ($o(p1, p2)$) のに対し、da および denn は、2つの態度オペレータ (Einstellungsoperator) を結びつけるとする ($o(e(p1), e(p2))$)。また還元的推論(推論的用法に相当)の場合に weil を用いることができるのは weil の省略的用法のためとする。さらに denn と da の相違点は、da が発見の確認を表すのに対し、denn は主張を表す点だとする。また warum 文に weil でしか答えられないのは、weil それ自体がテーマであるためだという指摘もある。

Pasch, Renate (1997): *Weil* mit Hauptsatz – Kuckucksei im *denn*-Nest? In: Deutsche Sprache 25, S. 252-271.

まず北ドイツでは少なくとも70年代まで話し言葉で用いられていた denn が weil にとって代わられたのはなぜかについて考察する。その理由は weil が denn の有する機能をすべて備えているため、機能的により一般的である weil を使うようになったのではないかとする(語彙的一般化)。また副文 weil と主文 weil は機能的にはほぼ交換可能だが、聞き手に意識されていないと話者が仮定する情況を一義的に特

徴づける必要性のある場合には主文 *weil* が選ばれると説明する（統語的特定化）。また *weil* はレクシコンにおいて抽象的な1つの意味をもつのみで、機能的差違は主文と副文の語順のもつ機能で決定されるを考える。最後に話し言葉において *denn* は生き残らないであろうと予測を立て、論を締めくくっている。

Sandig, Barbara (1973): Zur historischen Kontinuität normativ diskriminierter syntaktischer Muster in spontaner Sprechsprache. In: Deutsche Sprache 1, S. 37-57.

主文 *weil* は近年の傾向ではなく、中高ドイツ語以来話し言葉には連綿と存在していたが、規範によって差別されることで書き言葉に現れなかつただけである可能性を示唆。そのような歴史的な連続性がみられるものとして他に左方外置、語彙的後置などが挙げられている。

Uhmann, Susanne (1996): Nur ein Sturm im Lexikonglas. Zur aktuellen Verbstellungsvariation in *weil*-Sätzen. In: Wuppertaler Arbeitspapiere zur Sprachwissenschaft 13, S. 1-26.

weil を扱う際、統語論、意味論、語用論の3つのレベルを厳密に区別し、それぞれをモジュールとして扱うべきことを主張。2つの *weil* はすでに別項目としてレクシコンに登録されていると考える。

Uhmann, Susanne (1998): Verbstellungsvariation in *weil*-Sätzen: Lexikalische Differenzierung mit grammatischen Folgen. In: Zeitschrift für Sprachwissenschaft 17, 92-139.

Uhmann (1996) を拡大したもの。2つの *weil* (= *weil*₁, *weil*₂) は別のレクシコン項目であり、2つは統語、意味、語用的レベルでそれぞれ厳密に区別されるべきだとする（モジュール的アプローチ）。統語レベルの差違は統語的仮説で表される。それに従えば *weil*₁ は副詞文の特性を有するが、*weil*₂ は等位接続に分類される。意味的レベルの差違は意味的仮説によって表され、それによれば *weil*₁ は *weil* 文と結びつく文 S2 の命題内容の理由、*weil*₂ は S2 の発話から推測可能な状況を表すものである。語用的レベルの相違を表す語用的仮説によれば、

*weil*₁ の発話は S2 の発話で遂行される発話行為によって統合されるが、*weil*₂ は S2 の発話で遂行される発話行為から独立しているとされる。なお Uhmann (1996) では *weil* は2つであるとされていたが、この研究では統語的には *weil*₁ のようにふるまうが、意味・語用的には *weil*₂ と共通する *weil* を *weil*₃ として挙げており、またさらに *weil* 文が前前域に立つ *weil* を4つ目の *weil* とする可能性も示唆している。

Van de Velde, Marc (1974): *Noch einmal zur Hauptsatzwortstellung im Nebensatz*. In: *Muttersprache* 84, S. 77-80.

Kann (1972) の批判。Kann が副文における主文の語順という現象と、枠外配置という現象とを混同していることを指摘。

Wegener, Heide (1993): *weil – das hat schon seinen Grund*. Zur Verbstellung in Kausalsätzen mit *weil* im gegenwärtigen Deutsch. In: *Deutsche Sprache* 21, S. 289-305.

2つの *weil* を従属的 *weil* と等位的 *weil* と呼んでいる。2つの *weil* の論理統語的の差違について詳しい。他にフランス語と英語の因由接続詞との比較も行っている。また主文 *weil* が好まれる理由についての考察がある。

Wegener, Heide (1999): *Syntaxwandel und Degrammatikalisierung im heutigen Deutsch? Noch einmal zu weil-Verbzweit*. In: *Deutsche Sprache* 27, 3-26.

近年の *weil* 研究を振り返り、その問題点を再検討する。まず *weil* に副文の語順から主文の語順への変化が起こっているのかという問いに対しては、他の因由接続詞 (*denn*, *da*) をも考慮するなら、主文 *weil* は *denn* の代わりに使われるようになったにすぎず、そこに起こったのは、統語的な変化ではなく語彙的变化であるとする。また *weil* だけでなく他の因由接続詞も含めて語順を考察するなら、主文の語順は話し言葉だけでなく、書き言葉にも同程度に広まっているとする。さらに *weil* のあとの語順の歴史的継続性についても否定的意見を述べている。ま

た主文 weil が副文 weil もしくは denn と機能的に同じであるかという問いには、主文 weil は副文 weil とは統語的、語用的な違いがあるが、denn の機能はほぼ完全に担いうるとしている。

Weisgerber, Bernhard (1993): Vorsicht bei Subjunktoeren, weil: da tut sich was!
In: Wirkendes Wort 43, S. 1-4.

品詞分類の問題点について述べる際に、その例として weil を取り上げてしている。weil は従属的に使われるほか、主文の語順を従えることもあるため、果たして従属接続詞に分類してよいのかと問題を提起する。

Weinrich, Harald (1984): Die Zukunft der deutschen Sprache. In: Carstensen, Broder et al. (Hg.): Die deutsche Sprache der Gegenwart. Vorträge gehalten auf der Tagung der Joachim-Jungius-Gesellschaft der Wissenschaften. Hamburg, am 4. und 5. November 1983. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. S. 83-108.

「ドイツ語の将来」というタイトルが示すように、ドイツ語の将来の姿についていくつかの予測を立てている。主文 weil がさらに広まるであろうと予測の他、動詞の名詞化の傾向も同じく強まるとする。また属格と未来形は反対に衰えていくであろうと推測している。

Willems, Klaas (1994): *weil es hat mit Bedeutung nicht viel zu tun*. Zum Sprachwandel einer Konjunktion. In: Deutsche Sprache 22, S. 261-279.

Keller (1993a, b) に対する批判。事実的 weil から推論的 weil への発展をメタファーの過程と同一視すべきでないこと、Keller が言語的意味と思考内容を同一視していることなどを指摘。さらに推論的 weil は意味変化の結果生じたのではなく、weil のあとの語順が変わったのであり、weil の機能は元来1つであって、問題にすべきなのは weil 自体ではなく、定形第2位という語順であるとする。さらに副文 weil で表すことのできない主文 weil はないという見方を提出している。